

遺稿

孝子 宮沢賢治の父の思出

松本 日宗

孝子 宮沢賢治の父の思出

松本日宗

この一生の間どこのどんな子供も受けないような厚いご恩をいただきながら、いつも我慢（自らほこり我意を張ること）でお心に背きとうとうこんなことになりました。今生で万分一もついにお返しできませんでした。ご恩はきつと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします。

どうかご信仰というのでなくともお題目で私をおよびだし下さい。
そのお題目で絶へずおわび申しあげお答えいたします。

九月二十一日

賢治

父上様

母上様

昭和六年（一九三二）賢治が重病を得て死を覚悟した時に書かれた手紙である。それから二年病床にいながら詩や童話の仕事をにつづけ、

病いんちきのゆえにもくちんいのちなり
みのりに棄てばうれしからまし

と辞世ともをぼしき歌をよんで、昭和八年九月二十一日の臨終の日をむかへたのです。その時のありさまを令弟の清六氏が

二十一日のお昼ちかくに、二階で「南無妙法蓮華經」という高い声がします。家中の人たちがおどろいて二階に集まりますと、兄の顔は青ざめてゐましたが、合掌しておだいもくをとなえてゐました。

父が「遺言することはないか」と申しますと、賢治はこんへんの言葉で「國訳妙法蓮華經を一千部おつくりください。表紙は朱色、校正は北向氏、お経のうしろには『私の生涯の仕事はこの経をあなたのお手もとにとどけその中にある仏意にふれて、あなたが無上道に入られますことを』ということを書いて知己のかたにさしあげてください」といいました。父がその通り紙に書いて、それを読んで聞かせてから、はじめて心から兄をほめたのでした。そして父は「後は何もうことはないか」と聞きますと、「あとはまた起きてから書きますから」といって、私どものほうを向いて「をれもとうとうおとうさんにはめられた」とおもしろそうに笑いました。

それからすこし水をのんで、からだじゅうを自分でオキシフルをつけた脱脂綿でふいてその綿をぼろつと落としたときにはもう息を引きとっていました。

(岩崎書店版 新宮沢賢治童話全集第十二巻より引用)

賢治が校正を遺言した北向氏は何かの都合でできなくなり、私にまわってきた。思ひもよらぬ大法幸であつた。当時私は放浪の果、敗残の身を宗門の古老先輩の厚情によつて、盛岡の本正教会で少ない御信者方から手厚いお世話になつてゐた。布教力もたず信者をふやすすべもないままに、自分で原稿を書きガリ版に刷つた四十頁ほどの教誌をこさへて、御信者さまに配つてゐた。その一冊が藤島弥兵衛さんの手から、高橋勘太郎さんの手に渡つた。此の人は岩手の教信沙弥と云はれた程の大念仏者で学殖の深さは、島地大等師と対等で話ができたという。此の人が賢治の父宮沢政次郎氏の無二の法友であつたので、教誌は宮沢さんにリレーせられて「材木町の法華寺に變つた

坊さんが来ているから此の人に」と云う次第で私が校正をお引受けしたのである。賢治のことは勿論何一つ知らなかった。

初めて教会に見へられた時は、木綿の和服に地味な袴をはかれ、慈眼福相で物腰しやわらかなお方と見へたが、その声は朗々と明晰であった。お土産として賢治の自費出版「春と修羅」を頂いた。用件の話がすんで、私に「お供したい」と外出を乞はれたので一緒に教会を出た。トタンに手をあげてタクシーを止められた。そして「公会堂の多賀」という、市で一流の西洋料理店レストランに車をつけさせた。タキシードを着て蝶ネクタイをつけ端然と立ってゐるウェーターのある個室で、ほんものの西洋料理の御供養にあづかった。話題は実に豊富で仏教用語がスル／＼といとも自然に発射される。私は貧乏生まれの貧乏寺育ちで、初めての洋式食事には相当まごついた上に、次元の高い仏教の話をきいてとまどつたが、「これははじめに知っておいて頂かねばならぬ」と思つて盛岡へ来るまでのいきさつを語り、刑余の身であると告白したが、翁は平然として「人間はおたがいになな前科者だんすナア」と、さりげなく話題を変へしてまわられた。私は初対面初対面で圧倒されてしまったわけである。

その後、時々盛岡に来られると必ず「夕顔瀬多賀」とか「多賀本店」とか一流の料亭へ招かれて御馳走になった。或る時、翁の法友の念仏者で盛岡で名のある紳商の某氏と三人会食した。前後するが、どんな御馳走でも酒類を附けたことは一度もない。此の時も某氏だけは銚子一本あけ、さて室外に出る時、某氏が先頭に立った。宮沢翁はそれを引き止めた。ふりかへりいぶかる某氏に翁は私の改良衣の袖を取つて二、三度振つてみせた。某氏は「イヤこれは法兄にやられました」と笑つて、私に「どうぞお先へ」と挨拶した。僧宝護持の念に徹した人だったと思う。その時私は思った。此の人はもう法華経を読みこなしてゐられると。すなわち経の法師品に

人有り仏道を求めて一劫の中に於いて、合掌して我が前に在りて無数の偈を以て讃めん、此の讃仏に由るが

故に無量の功德を得ん、持経者を歎美せんは其の福復彼に過ぎん。八十億劫に於いて最妙の色声及び香味触を以て持経者に供養せよ。

と経の通りいつも最上の御馳走を頂いた。

さて食物の話ばかりして申し訳ないが、いよいよお経の出版が出来上った時、印刷所長の山口氏（此の方は禅の居士で、面会の度に禅問答のようなことを機鋒するどく吹っかけられて閉口した）が、「いづれ正誤表は後日に出しませう」と云ったので、私が言下に「誤りはありません」と云ったら、居士はびっくりした顔をした。後でできれば人に語って「あんな気の強い坊さんは見たことない、自分は印刷業をやり出して三十年になるが、自慢ではないが誤植のない出版物は一度も出したことが無い」と云ったそうだ。私は「校正に誤りが有っては大変」と大きい天眼鏡を二つ使って一字一字校正したので、そんな強気なことが云へたのかと思う。その私の強気にかかわらず、有った。穴にも入りたい気持だった。宮沢翁におわびを心から申し上げた。翁は「人間のやることは仕方ない事です。これは大瑾の小瑕と云うものです。気にしないで下さい」と云ってなくさめて下さったが、今日までお経を見る度に自責の念に堪へない。

さて校正が了って私が「おかげさまで六回法華経を訓読させていただきました」とお礼を云った。校正は三校まであって、一枚に二回づつ目を通したから六回になる。それをきいて、翁はそれだけキツイ顔をせられて「たった六回でおしまいですか」とブツリと云ったままの永い沈黙である。まさに維摩の一黙、声雷の如して全身にひびいた。その翁の心は此の経を今生後生よみよみ通しなさいとのお心とうけとめた。已来、隨身不離の経としてよみよんだ。今はすでに声をうしなつてそれが不能になり、視力を減じて文字すら見えない。老はかなしきものなりけりである。

さて、装訂が出来上ると、私に五十部贈って下さった。私は第一に四國の老師に、第二に小笠原日堂にと順次に送った。宗誌『無上道』は此經の終りの賢治の献本の遺言にかかわりなしとしない、盛岡の教会で私の敗残の身をあたたくはぐくんで下さった信徒の方への贈呈は勿論である。目が見へず三味線をひいて世すぎしてゐる夫婦にも贈った。人を分けへだてすることが最も賢治の忌むところであると思つたから。

出版完了後、一日、翁が教会に來られ、勞をなぐさめ度いと、タクシーを呼んで盛岡郊外のツナギと云う温泉に案内された。衣類を脱いだ二人の赤裸像をくらべて見て、翁の体相が仏像にもまがうほど円満整正で、私のやせて貧相な体とくらべて、私は過去の宿福の相違と云ふものを、此の時ほどしみじみと感じたことはない。

面会のたびごとのよもやまの話の中で、私は翁の口から賢治を知つたのである。三世の因果、六道の實在、救済の覚者の實在、それへの祈りの通じること、加護力、それを知る超能力を賢治が持つてゐたこと等々、語ればきりがない。その前、私は國の老師の寺の宗祖六百五十遠忌に帰省して初めから終りまで奉行し、帰途、小笠原を訪ねると、『君を連れて行く所がある』と、南海電車沿線の諏訪の森の真鍋子爵家の日本心靈学会の実験会につれて行かれ、そこで私は望んで此の目、この耳で超能力、靈覺、靈視等を実験してゐたので、翁の語る賢治の、『第四次元世界』は苦もなくのみこめた。そして小僧の時から本門八品の中で一番長たらしくて荒唐でイヤだった法師功德品の現浄六根の説相が一ばん有難くよまれるようになった。そして今まで卵のカラのように心の中にくつついてゐた無神論的な弁証法的唯物史觀の思考から來る一切の妄想がすっかり除去せられて、新しく法華經と宗祖への信を得た。思へば善智識は大因縁である。

盛岡では二年居て、東京の宗務庁に書記で入ることになった。前歴を問題にして反対した人があだが尤もの話である。時代は満州事変から支那本土に拡大した時、赤の前歴を持つ者を一宗の機関に入れることは常識では考へら

れぬ。それを押し切つて採用して下さった貫名総監・松井の内局の広大な慈慮にはお礼の言葉もない。

東京でも翁は上京すると電話をかけて来て、目黒の雅叙園と云う高級中華料理店へ案内して下された。ある時、新宿の映画館へ行こうと云はれる。わけを問うとイギリス皇室の戴冠式の天然色映画がある。これは地方では見られないからと云うのでお伴した。目的の記録映画の前にはチャンバラやなんかがある。フト横に坐つてゐる翁を見ると目をつむつてゐる。又見るとまだつむつてゐる。わけを問うと「三尺ものは見ねえことにしてやんす」と答へられた。さて戴冠式の天然色映画も見て外へ出ると翁は一言「御大層なことをするもんでやんすナア」と言はれたことを記憶してゐる。

前後するが、私が盛岡を辞する際に暇乞いに宮沢家を訪れた。寒い日で粉雪が降つてゐた。昼食を御供養になつた折、賢治の母上が「寒いからブードー酒でも」と言はれると、翁は言下に「松本さんには酒は無用です」と云はれた。その時、一人の齡とつた法華僧のよれよれの改良衣と輪袈裟をかけた人が見えてゐた。まことに天真らんまんで、賢治童話の「虔十公園林」の虔十をお坊さんにしたような方だった。何を云つても「ハアそでやんすか、ハツハツ」と無邪気に笑つた。翁は別室で私に「あれがほんとうのお坊さんでやんす。田畑を耕して五六人の子女を片づけて出家したので、学はありませんが慾も邪念も少しもありません。あるのは信心だけです。ああした方に拜んでいただくのと有難いです」と云はれた。言外での私への訓戒であると承つた。宗祖大士が

此の僧は無戒なり無智なり。……

智慧は牛馬にるいし、威儀は猿猴ましろにて候へども、あをぐところは釈迦仏、信ずる法は法華経なり。例せば虵の珠をにぎり、龍の舍利を戴けるがごとし。藤は松にかかりて千尋ちひろをよぢ、鶴は羽を待みて萬里をかける。此は自身の力にはあらず。……我が身は藤のごとくなれども、法華経の松にかかりて妙覺の山にものぼりなん。

一乗の羽をたのみて寂光の空をまかけりぬべし。此の羽をもて父母・祖父・祖母乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり。あわれいみじき御たから（下略） 孟蘭盆御書

と仰せられた御遺文をよまれてゐたのであると確信してゐる。それでこうした僧を請じて回向を乞うてゐたものと思つてお暇した。

ところが、其の後電話で、「もう一度お話ししたいことがあるから来宅願へまいか」との事でお伺ひした。いろいろ話の末に、このあたりの狩人が狐をとるには、狐はネズミの天ぶらが好物で、狩人は山の中で油でネズミを天ぶらにしてそれをわなにかけておきます。狐は匂ひに引かれて集まつて来るが、餌のまわりを鳴きながらめぐりあるきますが、狐はかしい動物ですからワナと知つてゐるから喰付かない、夜通し鳴いてあるいて、東がしらむ一寸の間にそのワナにかかるのです。あなたもこれからの一生の間に必ずこうした機会があると思ひます。どうか此の話の時々思ひ出して下さい、とのことであつた。ほんとうに身にしみるお話であつた。それで余談ながら「野狐不寝観天婦羅」と成語自書して枕頭にかけてゐた、が今は外してゐる。七十五才の半死の僧にはネズミの天婦羅はもう食べられない。

翁はお別れしてからも度々手紙を頂いた。書風、文体、内容ともに格調の高いもので、一篇の終始張りつめた心絃をかたぬる思ひであつた。東京、比叡山、丸亀と沢山のお手紙は大切に保存してゐたが、大病を患つた時、死後、後に残してもむなしく紙屑になるのを恐れて宮沢家にお返しした。その時は盆経にも行けず、死は覚悟して本山の松井御貫首猊下や檀徒中には遺書をしたため、「一劫に毘富と積みにし舍利なれば来らん世こそ法に棄つべき」と、賢治調の辞世をよんだ程だったが、経絡治療を下さつた方のおかげで一命はとりとめた。話は外れたが、その多くの翁の手紙の中に一通手許から離れた重要な、翁の我子賢治に対する本心を語つたものが有つた。これは私す

べきでないと思つて、当時中外日報主筆の三浦参玄洞氏に送つた。氏は浄土真宗の僧で黒衣同盟などで脱宗して中外記者になつた人で、その自宅に小笠原と共に度々伺つてゐる。十字屋版の賢治全集第三巻童話集を贈呈して以後、賢治に傾倒して中外で感想を発表してゐられた。私の東北行きも氏に影響されたことが大きい。その書翰はいつもの巻紙毛筆には非ず半紙に鉛筆で細々と書かれたもので、重要な点は

「賢治も農業等の不徹底さを捨てて、あれば受用し無ければ飢死することもかなりの覚悟を以て進みたらば、もう少しひらけし境地もありしなるべく、今にして思へばそのみが心残りにこれあり候」

の一句だけはつきりと記憶してゐる。これは明らかに賢治の出家を心中で願つてゐたしるしであろう。此の手紙は三浦参玄洞家にあるであらうか！

翁はある時、手紙も何も添へずに一連の念仏宗の数珠を送つて來られた。私は理解に苦しんだ。私にこの数珠で念仏せよとの意か？ あり得ぬことだ。そしてフト翁の話所思ひ出した。それは「私は松本さんのお国の讃岐を知つてゐます。私が若い頃、古着を扱つてゐました時に讃岐へ買出しに行つたものです。それは讃岐の木綿は質が強く、こちらの農民の作業衣の肩あてには欠かせないものですから」と云はれたことを思ひ出した。私の町には「かい堀り寺」と云う念仏宗の寺があり、そこには京都を追はれた法然が此地で庶民が水に困つてゐるので舟のかいを以つて砂を掘ると清水が出たとの伝説の寺で、その井戸も残つてゐる。私は、これは翁が念仏を捨てた印に送られたと思惟して、その数珠を井戸の中に投入れて翁が悪魔の法然から脱出した証にした。

私は賢治童話の中で「雁の童子」に特に心がひかれる。その中の須利耶は父の翁であり、その妻は悲母であり、雁の童子は賢治自身であるような気がする。

ブリバーがザメンホフ（エスペランソの創設者）の傳記に「父より頭悩を、母より心臓を、環境より印象を」と

書いたが、日蓮大士はもつと的確に「我が頭は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口は父母の口なり。譬へば種子と菓子と身と影との如し」(忘持經事御書)と申されてゐる。賢治の生涯の仕事はその父の内なるものが一挙に奔出したのではなからうか。翁が老後視力が衰へて手紙が書けなくなつた頃、清六氏の御返事に「床上に縱令經^{トモ}百劫^ヲ所作業^ハ不^レ亡^セ。因縁會遇^ノ時報果還^テ自^ラ得^ル」と書かれた書を半ば見えない目でじつと眺めてゐます」と書かれてあつた。私は後日、日隆聖人の御聖教を拜して法華經の決定業を転化する力を

此れ等の業因感果の道理は法華經以前權教の意なり。今經の意は煩惱即菩提、生死即涅槃して經力深大の故に何なる決定業なりとも免る、是れ經王の勝用なり。……本門久遠本覺長壽の智力にて悉く之を轉ず可きなり。

(本門弘經抄第十六卷)

と。私はこの御聖教が目につれた時は翁すでに逝き、お耳に入れなかつた事を残念に思う。

私は表題に「孝子宮沢賢治の父」と書いた。が伝記や自記によると父の命に従はなかつたこともあつたかに見へる。けれども法華經信者として孝子の第一になすべきことは父母に法華經をすすめる事であり、日蓮大士がその範を示されてゐる。是れが善の中の大善、孝の中の至孝で、賢治はそれを完全に実践したから、眞の孝子であり、日蓮大士の弟子である。日蓮大士は

悪の中の大悪は我が身にその苦を受くるのみならず、子と孫と末七代までもかゝり候ひけるなり。善の中の大善も又々かくの如し。目連尊者が法華經を信じまいらせし大善は我が身仏と成るのみならず、父母仏と成りたまふ。上七代下七代、上無量生下無量生の父母等存じの外に仏となり給。乃至子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生三惡道を離るゝのみならず、皆初住妙覺の仏となりぬ。故に法華經の第三に云く、願^ク以^テ此^ノ功^ノ徳^ヲ普^ク及^ス

於一切^ニ我等^ニ與^ス衆生^ニ皆^ニ共^ニ成^ス仏^{道^ヲ}と云々。(五箇盆御書)

と仰せられた。私はかつて翁に、賢治・とし子のお二人はあなたの家に来生した菩薩でせう。經の妙莊嚴王本事品によればそうとしか思へないと申し上げたことを記憶してゐる。翁も思い当られたであろう。そして心中では此の二人を

世尊、此の我が二子已に仏事を作しつ。神通變化を以て我が邪心を転じて、仏法の中に安住することを得、世尊を見たてまつることを得しむ。是の二子は是れ我が善知識なり。宿世の善根を發起して我を饒益せんと欲するを為ての故に、我が家に來生せり。

の御文にふかくふかくなづかれたことと拝察する。

私は老病を發してすでに三年余、筆をとらなかつたが、法華シリーズのスタッフからの依頼で「老ひては若きに従へ」と思つてここまで書きつづけた。執筆の日が二十一日、賢治の御命日であつた。少し饒舌にすぎたと自責してゐるが、事のついでに一筆加へておき度い。それは賢治遺囑法華經の底本は明治書院版、島地大等師の国訳妙法蓮華經である。がそれに依らなかつた所が二箇所ある。一つは普門品の偈の中に私入せられた。弥陀讚偈である。明らかに偽經であり、念仏信者の父を法華に引入するために苦心した賢治の怒りを買ふと思つたから削除した。第二は神力品の長行の末、

若は園の中に於いても、若は林の中に於いても、若は樹の下に於いても

が、島地本では「園中林中樹下」となつてゐる。尤も大方の人が法華禪宗ではそのように読まれてゐる。ところが私は八歳の小僧の時から「園の中」との“”を入れてよんでゐる。それで賢治が林を賞で園を愛し樹下を好んだから、底本に違つてもエイツまゝよと現在のようにした。幸ひに他からは何も言はれなかつた。ところが昭和四十八年十月に、宗立学林校舎完成記念に学校長の松井日宏大僧正が復刻出版した心空版妙法蓮華經（嘉慶元年、一三八

三二、これは日隆聖人が少年時代から八十歳入滅まで終身護持のお経で、本興寺の重宝になってゐる。その上この經典は庶民の為に返り点を打って日本語で読めるようにしたと当代の詩僧義堂周信が後書してゐる。それに依ると、「園の中、林の中、樹の下」となつてゐる。それで私はホツとした。日本最初の訓点版の訓に従つたことになるから。しかもその經典の出版施主が道儉約齋居士と云う、儉約の二字に自らを粗にし他を豊にする翁の姿を偲ぶのである。翁は昭和十七年の夏、『國訳仏垂般涅槃經教誡經』なる自家版の經典を出版して贈つて下さつた。私は不受余經一偈の心乍ら、これは法華經の安樂行品の四安樂行のジュニア版とも思はれ、また翁が来生の生活の規範ともせられたものとも且つは賢治の来世の出家者としての姿を予想したものとも思はれ大切に愛蔵してゐる。

そして私は思う、翁は来世には必ず賢治と共に法華經の中に出家修道せられるであらうと、それを念願してゐる。私がある時ふと邪念がさして妹尾義郎氏のように社会生活の中に法華經を行じたいと云ふと、翁はしばらく返事せず「リコーな雑魚は陸に上る」とぼつんと云はれた。そしてしばらくたつて『お坊さんになることは、如来と云う大富長者の家に養子にもらわれたと思はれてはどうでせう』と云はれた。今も耳底にある。

さて半世紀も前のことを思い出の糸をつなぎ合せて今まで書いた。レンズをたよりに文字をききみこむ手もおぼつかない。最後に雁の童子のおわりのことはで筆をおさめたい。

尊いお物語をありがとうございました。まことにおたがいちよつと砂漠のへりの泉でお目にかかつて、ただいつときを、いっしょに過ごしただけではございますが、これもかりそめのことではないと存じます。ほんの通りがかりのふたりの旅人とは見へますが、実はおたがいがどんなものかもよくわからないのでございます。いずれはもろともに善逝スガタ(ぜんせいともよむ仏の十のよび名のひとつ)の示された光の道を進み、かの無上菩提に

至ることでございます。それではお別れいたします。さようなら。

岩崎書店版 新宮沢賢治童話全集 第十一巻

南無妙法蓮華經

あゝ孝子宮沢賢治の父政次郎翁

妙法 眞證院慈光日政居士

在在諸仏土常與師俱生

七十五歳流遍法師求名日宗 合爪

(付記)

この原稿は、かつて法華シリーズ第三、松本日宗著『法華信仰随想』（東方出版刊）の刊行準備中に、編集部依頼で、新たに文章とされたものである。ところが、これから活字としようという段階で、「やはり発表はとりやめたい」意をのべられ、編集部としては涙をのんで断念したという経緯があった。

中止の理由は明らかにされなかったが、それまで宮沢賢治という有名人と御自分の関わりを、殆ど公にされなかった御人柄と関連があるように想像された。

此の度、上人の追悼号が編まれるについて本稿の重要性に鑑み、御遺族の了解を得て公開されることになったのは、上人の御意志にそむくようではあるが、読者にとっては種々の意味で有難いことであろう。

当時、編集に携わった者として、上人の為、本稿の為に本稿掲載の事情を記しておく次第である。

大平 宏龍